SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

経線方向の稜線断面形よりみた赤石山系南部の地形

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-08-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 末久, 道二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00005977

経線方向の稜線断面形よりみた赤石山系南部の地形

末久道二

地形を論じる際に先づとられる方法に切峯面を作ることがある。これについては岡山氏の精しい研究があり、又渡辺氏、上田氏によつて赤石山系最高部は隆起準平原であり、その周囲に数段の山麓階がある事が説かれている。

筆者はそれに対して侵蝕の影響をあまり受けていないと思われる部分、即ち山稜の形より地形を観る方法をとつた。この方法によれば切峯面による場合に一つの等高線に含まれてしまう残丘の形状や分布がはつきりし、又山稜の概形が一目で分る利点がある。しかし、常に地形図と照合してみなければならない。

この様な考えから作つた図を第1図及び第2図に示す。即ち赤石山系南部の山稜の方向性は、大体南北である事より、地形図よりそのような主要分水嶺を選び（第2図）経線方向の投影面に投影した。（第1図）

さて、この山稜投影をみると、この山系が四つの特徴ある部分より成る事に気がつく。
北よりA、B、C、Dとする。

A：光岳－間岳

B：光岳－黒法師岳、光岳－大無限山、（青薙山南部）

C：黒法師山－大札山、青薙山－聖岳、大無間山－七ツ峯、

D：大札山－粟ケ岳、智者山南部－高山、青羽根附近－鳥帽子山、

I）　Aの部分に於いて山頂包括面を考えると、3000m、2800m、2600mの三面が考えられる。3000m面の間岳、塩見岳、赤石岳等は準平原上残丘とされている。次の二面については渡辺氏はまとめて一面とされたが、あまりにも見事な連りを示すので二面とし、山麓面の関係にありますとする。

東側山稜である間岳－笠ケ岳間は、その中間最底部附近に大井川沿いの北微東の向斜軸が当り、地盤運動の結果と大井川河頭の侵蝕によりこの様な地形を示すと解する。

II）　B及びDの部分についての山頂包括面を比べてみると同一の走向傾斜を有している。この山頂包括面は特にDの部分に於いて顕著であり、その走向傾斜を求めるとN45°E、2°ESとなつている。山麓面がこの様な急傾斜であり得ない。この傾きは更に遠く七面山－真富士の山稜にも現れている。その他C面中にも部分的に同様な傾きを有する山稜が所々に存在する。又牧の原

台地もほぼこの線の延長にある事等より、極めて新しい時代に光岳－笹ケ岳－七面山を結ぶ線以南で広範囲に及ぶ傾動隆起運動があつたのではなかろうか、という事が考えられる。そして、渡辺氏の報文にある牧ノ原台地の粟ケ岳－御前崎の線で曲折隆起したという考えは更に延長して御前崎－光岳の線と考えられるのではなかろうか。

Ⅲ)　Cの部分に於ける山頂包括面の走向傾斜は大体N 6 0°E、4°E Sとなつている。そしてそこに帯状の少し急な傾動運動を示している。C及びDの部分で大井川附近では走向が地層の走向と一致している。

上述した様な関係は富士川方面ではフオツサマグナ、西の天龍川方面では西南日本中央構造線の影響を受けて変動されているために同一方法では求められなかつた。

以上赤石山系の地形と題しての筆者の研究中の独特のものの概要を記し、こゝに諸氏の御批判を仰ぎたく思う。

稿を終るに当り、御教指下さつた竹内教官に深謝致します。

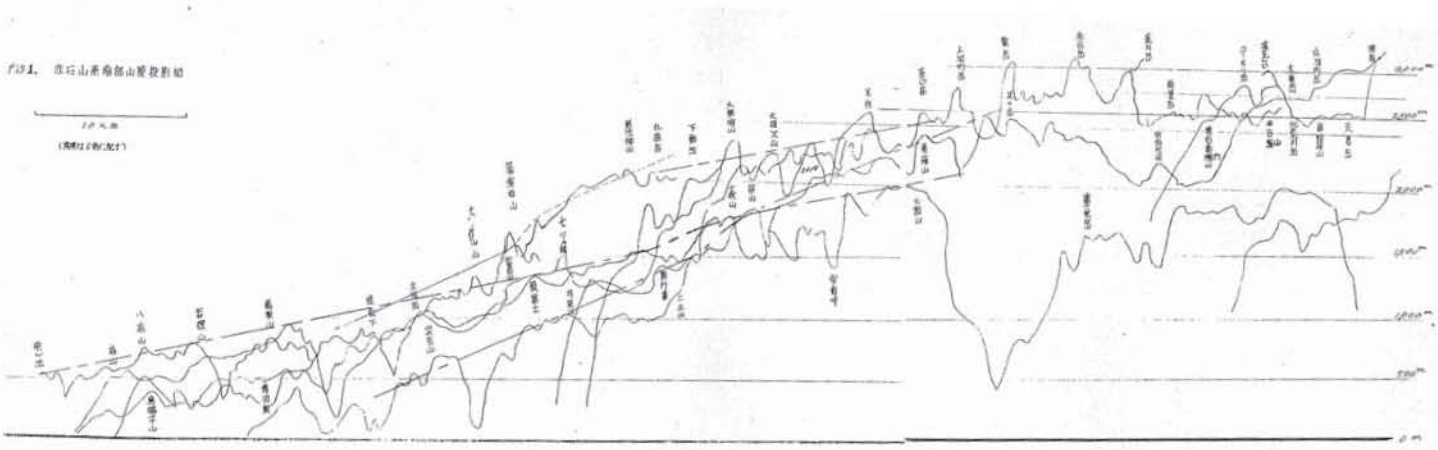
文　　献

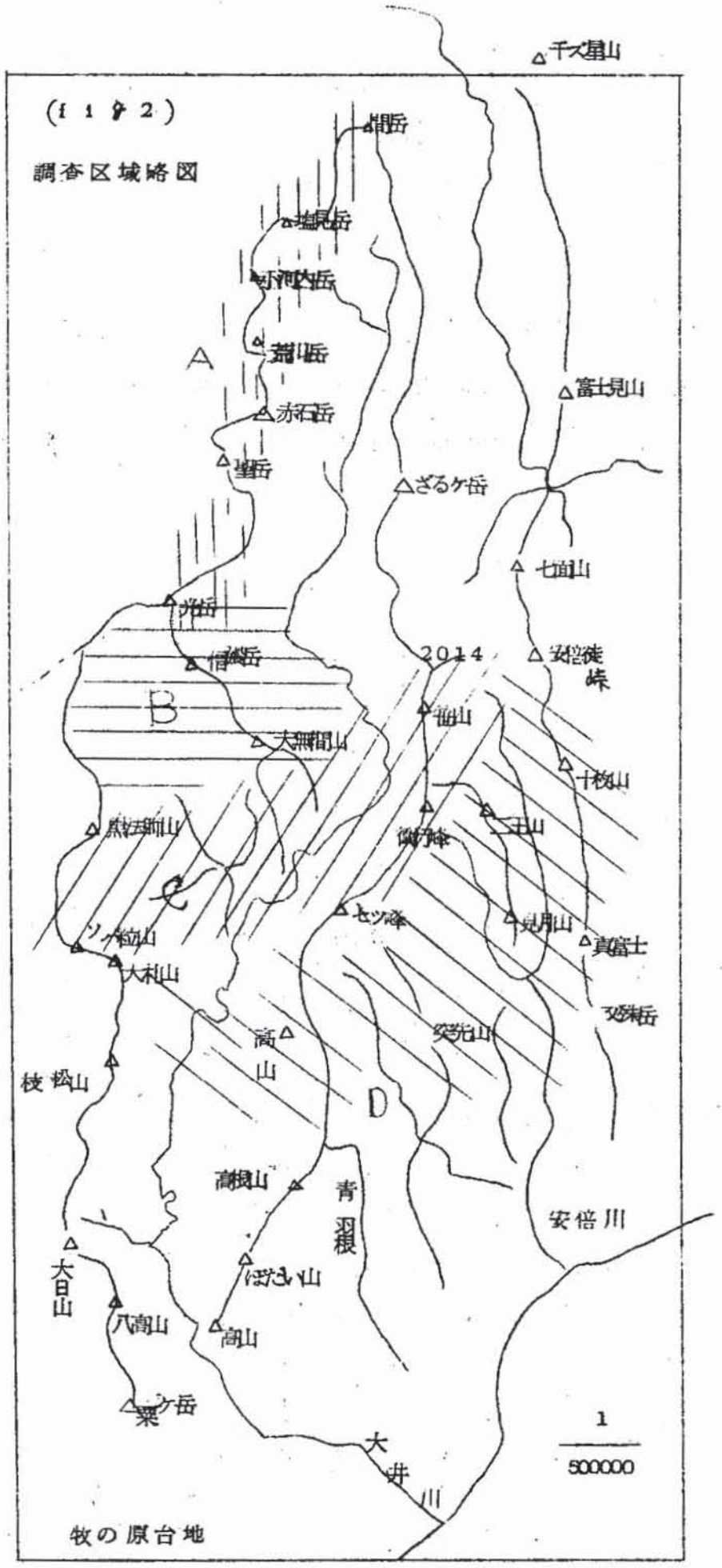
岡山俊雄；赤石山地の切峯面、地理学評論第４巻下

渡辺　光；赤石山系南部の地形と地形発達、地理学評論第６巻下

上田信三；山稜の高さと谷の平面形から観た赤石山地、地理学評論第１２巻上

図1. 京丘山系南部山稜投影図




(1 1 8 2)
調査区域略図
千ズ星山
間岳
塩見岳
小河内岳
荒川岳
赤石岳
聖岳
A
富士見山
ざるケ岳
七面山
光岳
信濃岳
2014
安倍峠
B
大無間山
十枚山
黒法師山
王山
C
見月山
真富士
ソヤ沢山
大利山
高山
枝松山
D
高根山
青羽根
安倍川
大日山
八高山
高山
栗ケ岳
1
500000
大井川
牧の原台地